

今週の為替相場見通し(2024年9月24日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		139.58 ~ 144.50	143.86	140.00 ~ 146.00
ユーロ	(ドル)		1.1069 ~ 1.1189	1.1163	1.0800 ~ 1.1200
(1ユーロ=)	(円)		155.45 ~ 161.14	160.65	155.00 ~ 163.00
英ポンド	(ドル)		1.3126 ~ 1.3340	1.3320	1.3000 ~ 1.3600
(1英ポンド=)	(円)	*	183.78 ~ 191.99	191.69	182.00 ~ 199.00
豪ドル	(ドル)		0.6700 ~ 0.6839	0.6808	0.6750 ~ 0.6900
(1豪ドル=)	(円)	*	93.87 ~ 98.31	97.95	97.30 ~ 98.80

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替デリバティブチーム 升谷 颯

(1)今週の予想レンジ: 140.00 ~ 146.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

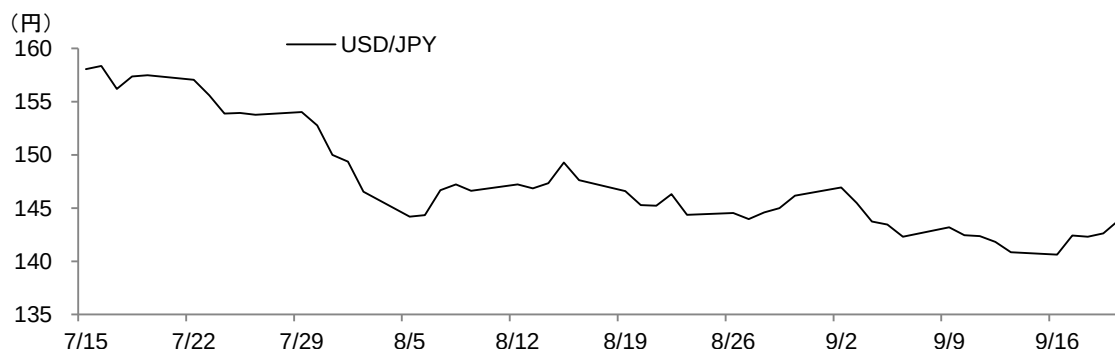
先週のドル/円は週初に年初来最安値を更新したが、FOMC通過後は堅調に推移した。週初16日、140.86円でオープンしたドル/円は、本邦休日の薄商いの中で140円を割り込み、海外時間には一時139.58円まで下げた。しかし、米9月NY連銀製造業景気指数の強い結果を受けて140円台後半に戻した。17日、東京時間は140円台半ばから後半でレンジ推移し、続く海外時間に発表された米8月小売売上高が市場予想対比上振れたことから142円台前半に上伸した。18日、海外時間にFOMCによる▲50bpの利下げ発表直後は140円台半ばまで急落したものの、パウエルFRB議長が会見にて「▲50bpの利下げペースが続くと捉えるべきではない」と今後の大幅利下げ期待をけん制する発言を行い、ドル/円は142円台後半まで上昇した。19日、前日海外時間からのドル買いの流れが続く中でドル/円は一時143.95円に達したが、その後142円台後半に押し戻された。20日、東京時間日銀は政策金利を現行の水準に据え置くことを発表した。声明文において個人消費の見通しが上方修正されたこともあり、ドル/円は軟調気味に推移した。その後海外時間にかけて強い買いが入る中、ドル/円は週高値の144.50円に達した。その後反落し、結局143.86円で越週した。

今週は米国では、27日(金)に8月個人消費支出(PCE)デフレーターが公表予定となっている。7月の結果は総合・コア共に前回発表から横ばいで、FRBの利下げ路線にとって好材料となった。先週の9月FOMCでは、インフレ見通しは下方修正された。労働市場に注目が集まる中で、インフレへの警戒度が引き下げられてはいるが、指標が市場予想対比大幅に上振れるような結果となればインフレ再燃への懸念から米金利上昇ならびにドル買いで反応するものと予想する。日本では、27日(金)に自民党総裁選の投票が予定されており、今回の総裁選は9名が立候補する乱戦模様となっている。1回目の投票で過半数を得る候補者がいない場合、上位2名による決選投票となる。石破氏、小泉氏、高市氏らが有力候補者とされており、一部の立候補者については金融政策と関連付けて報じられるケースがある。例えば、高市氏は以前メディアにて日銀の利上げに対して否定的な意見を表明している。特に日本の政治経済に詳しくない海外投機筋にとって、「ハト派的新政権」の誕生は円売りの材料となる可能性があるため、開票後の相場の急変動には警戒すべきであろう。

(3)先週末までの相場の推移

先週(9/16~9/20)の値動き:

安値 139.58 円 高値 144.50 円 終値 143.86 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替営業第二チーム 伊藤 基

(1) 今週の予想レンジ: 1.0800 ~ 1.1200 155.00 ~ 163.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は、各国の中銀会合が開かれる中、底堅く推移した。週初16日は1.10台後半からスタート。独金利の上昇などを材料にじり高で推移。ただ、今回のFOMCにおける利下げ幅について市場参加者の間で見方が分かれていたこともあり、1.11台前半まで上昇すると上値が徐々に重くなった。17日、独9月ZEW景気期待指数や米8月小売売上などが公表されたものの、大きな値動きには繋がらず、概ね1.11台前半を中心とした狭いレンジでの推移。18日にはFOMCでの大幅利下げ決定を受けて、瞬時にユーロ買いが強まり、一時1.11台後半まで上昇する場面があった。しかし、経済見通しやパウエルFRB議長の記者会見の内容を踏まえると、Fedが追加的な利下げを急がない姿勢を覗かせていると市場で解釈されるなか、一転してドル買い基調となり、19日には1.10台後半まで値を下げた。その後も米金利の上下を横目に値動きの激しい展開になった。週末に行なわれたウォラーFRB理事の講演では、経済状況次第で利下げペースが速まる可能性があるとの見方が示されると、ユーロ買いが一時強まる場面が見られたものの、FOMC直後に付けた週高値をブレイクするような明確な上昇トレンド形成とはならず、1.11台半ばにて週末を迎えた。

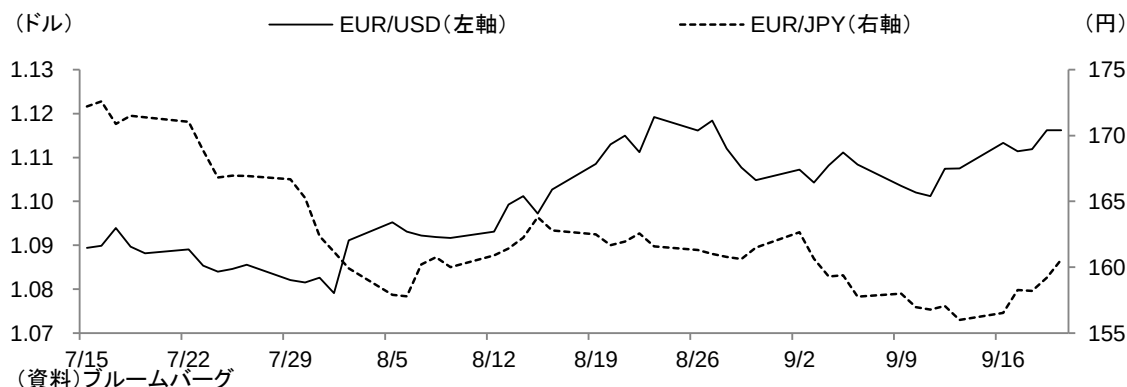
今週のユーロ/ドル相場は軟調な推移を予想する。今週の相場を考えるにあたっては、欧州と米国におけるマクロ経済動向がキーポイントになりそう。9月ECB政策理事会にて公表された景気見通しでは、域内の経済成長率が下方修正されている。特に、個人消費や総固定資本形成など景気の骨格を担う需要項目の引下げが目立っており、景気に対する先行き不透明感が強くなっている様子が伺える。また、ユーロ圏最大の経済大国であるドイツの景気が製造業を中心に芳しくないのも大きな懸念点として認識しておく必要があるだろう。一方で、9月FOMCでは、▲50bpの大幅利下げが行なわれたものの、経済見通しにおいては潜在成長率を上回る成長が続く底堅く推移するとの見方が示された。中銀ウィークを通過し、市場参加者が改めて各国の状況について整理を行なう過程においては、ユーロ圏と米国を比べた場合、ユーロ圏経済に対する先行き不透明感が意識されやすいであろう。その結果としてユーロは軟調な推移を余儀なくされる見ている。今週の主な経済指標としては、24日(火)に独9月IFO企業景況感指数、26日(木)に独10月GfK消費者信頼感、27日(金)にユーロ圏9月消費者信頼感(確報)などが予定されている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(9/16~9/20)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1069 高値 1.1189 終値 1.1163

(対円) 安値 155.45 高値 161.14 終値 160.65



3. 英ポンド

欧州資金部 天沼 幹

(1) 今週の予想レンジ: 1.3000 ~ 1.3600 182.00 ~ 199.00 円

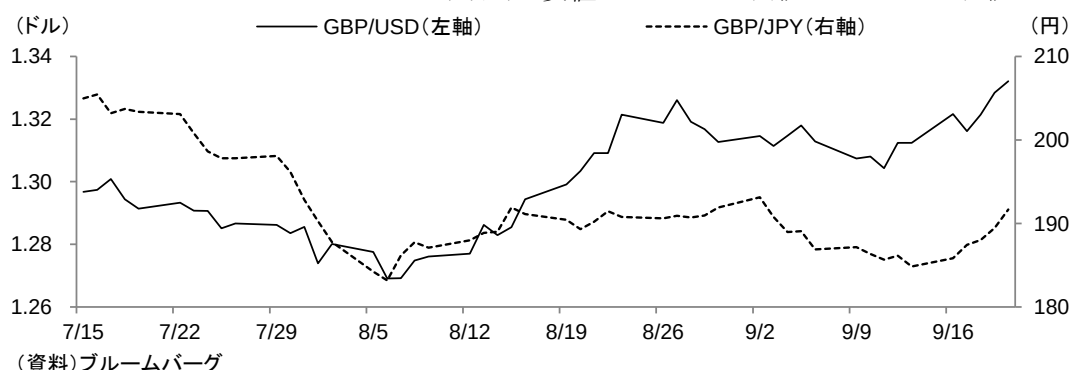
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間のポンド相場は、対ドルで大きく上昇した。週初は、FEDウォッチャーの記事に端を発した大幅利下げ観測が加速し、米金利も短期主導で下落。全面的なドル安で推移した。明けて17日は、翌日にFOMCを控える中、米8月小売売上高が市場予想ほどは落ち込まなかったことを受けて反転、ドル買いが広がる。翌18日、FOMC当日になると、再び▲50bp利下げが意識されたか前日の下げを打ち消し、実際に▲50bpの利下げが発表された直後は素直にドル売りで反応。しかしその後の会見で、パウエルFRB議長が今後の利下げペースに関してけん制するコメントを出し、勢い続かず調整となる。19日はリスクアセットが力強く上昇する中、イングランド銀行(BOE)の金融政策決定会合が市場予想通り据え置きとなり、また事前予想よりも据置き票が多くタカ派的と捉えられ、ポンドは底堅く推移した。20日は日銀金融政策決定会合にて市場予想通り政策金利が据え置きとなるも、会見にて植田日銀総裁が直近の利下げ見通しについてハト派なコメントを出し、円売りでクロス/円が上昇。ポンドも対円で大きく上昇したものの対ドルではほぼ変わらずとなった。

今週は、前週大きくハト派に転じたFRBとタカ派を維持したBOEの対比を受けて、引き続きポンドが対ドルで強含む展開を想定する。英経済指標では、23日(月)に英9月製造業PMI/サービス業PMIの速報値の発表が予定されている。直近の英経済指標では7月雇用統計や7月GDPなど景気回復の失速を思わせるものも見受けられるため、目立って弱含む内容がないか確認したい。米経済指標では、27日(金)に米8月PCEデフレーターが発表が予定されている。前週のFOMC声明文ではPCEインフレ率が下方修正された。2024年のPCEガイダンスは年間のものであるが2.3%となっており、8月PCEの市場予想と合致する。インフレへの警戒が弱まっている中、デysinフレ傾向を再確認したい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(9/16~9/20)の値動き: (対ドル) 安値 1.3126 高値 1.3340 終値 1.3320
(対円) 安値 183.78 高値 191.99 終値 191.69



4. 豪ドル

金融市場部 アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1) 今週の予想レンジ: 0.6750 ~ 0.6900 97.30 ~ 98.80 円

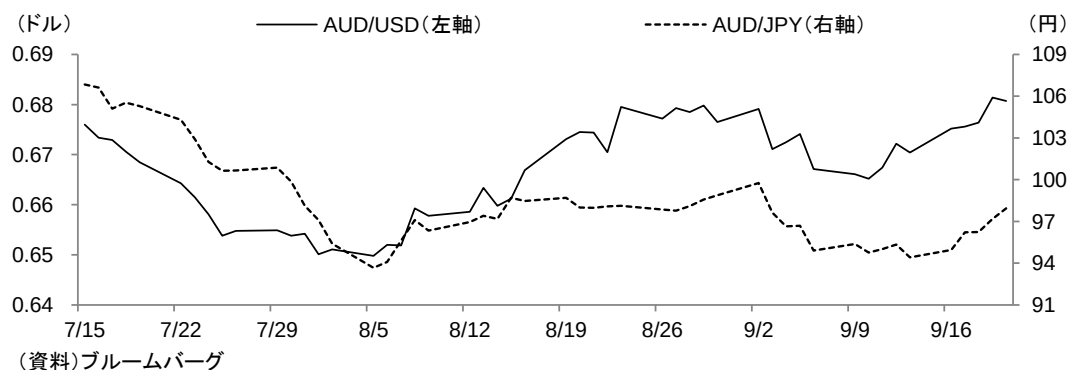
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは0.67台前半から0.68台前半まで上昇。16日、東京休場で薄商いの中、じりじりと上値を追う展開に。週央に予定されているFOMCで利下げ幅が▲50bpになるとの見方が強まり、米国債利回りは低下、米株は小幅続伸。豪ドルは0.6750近辺まで上昇して引けた。17日、発表された米8月小売売上高が予想外に上昇し前月分も上方修正されたことを背景にドル買いが優勢に。豪ドルは一旦売りで反応するも、すぐに買い戻されて0.6760近辺で引けた。18日、FOMCを控えて序盤からじりじりと上昇。注目されたFOMCでは▲50bp利下げが決定され、ドルは瞬間的に売りで反応。その後行われたパウエルFRB議長による記者会見で「今後の利下げペースは急がない」と発言したことを受けて、米長期金利は上昇し、ドルは買い戻された。豪ドルは、▲50bp利下げ発表直後0.6820まで上昇後、パウエル議長の発言を受けて0.6742まで急落。その後は小幅買い戻されて0.6760近辺まで戻して引けた。19日、序盤は小安く推移。豪8月雇用統計では新規雇用者数が予想を大きく上回ったものの、増加分は全て非正規雇用者数の増加であり、正規雇用者数は減少した。失業率は4.2%で横ばいだった。発表直後は正規雇用者の減少が材料視され、豪ドルは売りで反応し0.6738まで下落。売り一巡後は、労働市場がなおも逼迫しているとのストーリーが強まり、買い戻しの動きが入った。その後も、豪国債利回りが上昇し、株価が上値を追う中、豪ドルは急速に上昇幅を拡大し、年初来の高値0.6839を付けた。ただし高値更新には至らず、0.6810近辺まで小幅に売り戻されて引けた。米新規失業保険申請件数が4か月ぶりの低水準となったことも、豪ドルの頭を押さえた。20日、この日開催の日銀会合では政策金利を0.25%に据え置き、その後の植田日銀総裁による記者会見では「今後の追加利上げを急がない」と発言。これを受けて円安が大きく進み、豪ドル/円は一時98.30円近辺まで上昇した。対ドルでは0.68台前半を中心に推移し0.6810近辺でNY引けとなり越週。

今週の豪ドルは底堅い値動きを予想する。今週は23日(月)NZ8月貿易収支、豪9月PMI製造業/サービス業(速)、24日(火)豪金融政策会合(RBA)、25日(水)豪8月CPI、26日(木)米4~6月期GDP、27日(金)米8月コアPCE、米9月ミシガン大学消費者マインドなどが発表される予定。今週のRBAでは政策金利の据え置き及びタカ派姿勢の維持が大方の予想となっている。豪ドルは足許2か月間で上値レンジをじりじりと切り上げ、更なる上昇の機会を伺っているが、今週のRBAが想定ほどタカ派的な内容ではなかった場合は、逆を突かれて反落する可能性もある。又、今週の米8月コアPCEに関しては、先日のFEDによる▲50bp利下げが正当化されるような内容となるか、注目が集まる。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(9/16~9/20)の値動き: (対ドル) 安値 0.6700 高値 0.6839 終値 0.6808
(対円) 安値 93.87 高値 98.31 終値 97.95



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。